

編輯顧問

倉橋惣三

と

キンダーブック

明治・大正の絵雑誌から  
キンダーブックへ

浜口順子

キンダーブック以前の絵雑誌

今、手元に昭和五十四年発行の雑誌『太陽』(No.91)がある。「絵本」特集で、明治・大正・昭和に発行された絵雑誌がカラー刷りで紹介されている。キンダーブックが発行された昭和初期までにどんな絵雑誌が世の中に出回っていたのか、ざっと見渡してみる。明治初期は木版草双紙、そして明治中期の銅版草双紙。凶柄こそ江戸情緒たつぷりの浮世絵風、昔話や戦記物、芝居ぼんなどを題材とした、ちよんまげや日本髪の登場人物、前近代的な雰囲気たつぷりである。表紙は赤、黄、緑、青、黒のどぎついほどの原色刷り、墨筆で描かれたような太い輪郭線、舞台から大見得みえ切ってこちらにせり寄るような派手な演出、女子供をこれでもかと喜ばそうとするサービス精神がひしひしと伝わってくる。

現代に近い、なじみややすさを感じられるようになるのは、明治三十年代以降に刊行された、

子どもを特定の読者として意識した絵雑誌からではないか。そこでは子どもが子どもらしいバランスの体型と表情でかわいらしく描かれ、表紙の中心に据えられるようになってくる。『お伽絵解こども』『少年智識画報』『少女智識画報』『幼年画報』『家庭教育絵はなし』『幼年の友』などの他にも、多くの子ども向け雑誌が発行され、当代の画家の挿絵が入った、教育的內容のお話絵本が続々と刊行される。そこに垣間見える「智識」や「教育」というキーワードといい、そのかわいらしい子どものイメージといい、すでに明治初期のそれとは違う、近代的パラダイムに移行しつつあることは確かであろう（ちなみに、本誌『幼児の教育』が『婦人と子ども』という表題で創刊されたのもこの時期、明治三十四年であった）。

時代は二、三十年下るが、キンダーブックが企画された当時、「知識の宝庫」という意味で『チコ』という誌名の案も出ていたという（『フレールベル館一〇〇年史』二〇〇八年 p.47）。現代でこそ、「知識」を重視する保育、などと言うと、早期教育の表層性や質の低さを揶揄するようなニュアンスで受け取られがちだ。しかし、科学主義が台頭する直前の当時においては、「智識」という言葉には、もつと、知性の基盤たる素養を小さい子どもに供することへの大人としてのロマンが込められ、得てして大人の視点からの芸術文化に耽溺する弊もあつたのかもしれない。

### 倉橋惣三と、キンダーブック以外の絵雑誌

大正期に入ると、モダンで洒落たミニチュア絵本や、しかけ絵本、布絵本なども発行され、鈴木三重吉らの『赤い鳥』以外にも芸術性の高い絵雑誌が群雄割拠する様相を呈する。大正

四年に創刊された『日本幼年』に倉橋は監修者としてかかわったが、その意気込みが『婦人画報』（二〇五号 大正四年）に「新しい読物」として寄稿されている。産業化都市化の中で家庭教育の担い手としての「主婦」層が出現し、「お母様方」と呼ばれつつ、教育者及び教育材購買者として注目されていく時代である。「雑誌は」大人のものであるならば万一多少の誤りや欠点などがあっても、読者の理解力によってその弊を免れることが出来ますが、子供は理解力で弊を矯めることが出来ません。子供に於いてはなんら重きを置くに足りないような局部的の誤謬も甚だしい弊害のもととなります。」(p.50)

さらに倉橋は、幼年雑誌には高い芸術性が大事であると言う。「殊に近世教育思潮の一たる美的教育論のような論調から言えば、一冊の絵画雑誌一枚の絵といえどもその価値は軽んずべからざるものであります。(中略)また社会においても、よくこの積極的意義を理解して、この方面の画家の努力に対しては十分の尊敬と認識を払うようにしなければなりません。」(p.51)

大正十一年に創刊された絵雑誌『コドモノクニ』は、各雑誌で活躍していた岡本帰一、初山滋、武井武雄ら著名な画家たちを結集して、子どもの世界を言葉にして芸術的誌面に融合させた絵本を作り出し、高い人気を博する。倉橋惣三はこの雑誌に、北原白秋、野口雨情、中山晋平らと共に顧問としてかわり、自らも「水まきさん」「しんぶんやさん」など働く人の様子を子どもの目の高さから詩にしたものや、ユーモラスな遊び唄なども作った。どれも子どもの目の高さが感じられ、またそのイメージに合った挿絵に包まれている。

しんぶんやさん

くらはし

しんぶんは だれが もつてきて くれるのでせう  
いつも わたしの ねているうちに  
きつと げんかへ おいてある。

はなこさんに きいてみても  
たらうさんに きいてみても  
だれもしっているひとは ない。

さつき ごもんで あそんでいたら ゆうかんやさんが  
かけてきて ぼいと げんかへ なげてった。

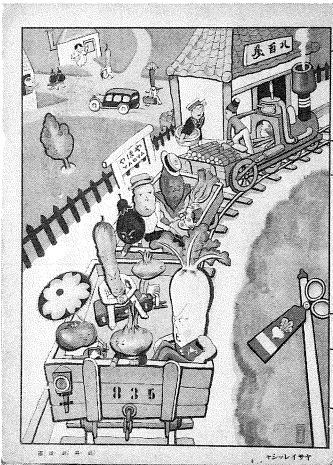
「あら あさのも あなたなの」といったらば  
「へえ」とわらって かけてった。

おとなりへ

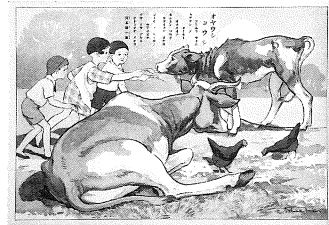
また おとなりへ。

また また そのおとなりへ。

(岡本帰一 絵)



▲武井武雄 画  
([「ヤサイレッシャ」]  
昭和11年7月)



▲岡本帰一 画  
([「オヤウシコウシ」]  
昭和5年6月)



▲清水良雄 画  
([表紙「セカイノイウギ」]  
昭和7年6月)

## 観察絵本というジャンルの登場

さて、『太陽』の絵本特集における「昭和」のページは次の見出しで始まる。「『観察絵本 キンダーブック』は、初めての幼児教育用絵本。幼稚園での直接販売という新しい販売ルートを開拓した。」そして、「昭和に入っても、『コドモノクニ』の人気は高かったが、対照的な絵本が昭和二年に誕生する」とある（p.39）。

キンダーブックが、大正十五年に公布された幼稚園令において新たに追加された保育項目「観察」の実施のために計画されたことはよく知られている。その背景には、大正期の童心主義や過度な芸術主義に傾いた幼児雑誌への批判、また当時の国家的な科学教育への関心の高まりもあった。しかし、そこに描かれた絵は、客観的科学的なものばかりではなく、依然として子どもの視線と関心をいつもとらえていた。岸田衿子の回想は、そのあたりの子供心を語っている。「キンダーブック、コドモノクニに限らず、昔の絵本を思い出すと、まず清水良雄や武井武雄の絵が浮かんでくる。武井調の絵には、何にでも顔が描かれていて、ニンジンにも、木やお陽さまにも顔があった。それが子どもにはうれしいことらしい。それぞれの好き嫌いもあるだろうけれど、子どもにとつて絵本の絵は、細かくすみずみまで描かれ、それでいて大小の対比がはつきり描いてあることが大事なようだ。いっぴきいっぴきの蟻や虫や、絵のすみのほうまで、たんねんに子どもはたどる。」（前掲『太陽』 p.41）

—— 続く ——

（お茶の水女子大学大学院）

（引用文は、一部現代仮名・文字遣いに適宜書き換えた。）